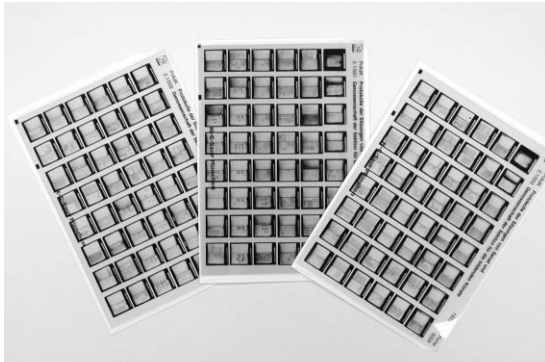


プロイセン芸術アカデミーおぼえがき

小 川 悟

プロイセン芸術アカデミーについては、ドイツ文学・文化の研究に従事しているものは誰でも知識として知っているが、アカデミー内部の資料文書については、おそらく知る人は少ないか、あるいは殆どいないと思われる。私もそのひとりである。なにしろマイクロフィッシュはその数が膨大であり、この紹介文を書くために全部に眼を通すことは全く不可能であった。



この資料集はマイクロフィッシュであるので、書籍と違ってスクリーンにかけて読まねばならないので、それがいささか厄介ではある。しかし、実際に写して見ると、手書きの文書から当時の息吹が伝わって来るように感じられる。このプロイセン芸術アカデミー記録文書集成は、いわば歴史の詳細を伝えている。ここでは、1871年から1955年に至る間の様々な資料を知ることができる。内容的には、第一部から第三部まであり、一部には造形芸術、音楽、文学のセクションにかんする資料が含まれている。二部には、総裁、会員、常任委員、書記官、定款、評議会議事録が含まれている。第三部は、展覧会、芸術賞、奨励金ならびに寄付にかんする記録が収められている。これらの議事録や資料は、通常は、公開されなかったため、結果しか知ることができなかった。

1933年に、ハインリヒ・マンとケーテ・コルヴィッツがアカデミーから放逐された時の状況を、直接的に知ることはできなかった。情報は二次的な形で伝えられた。たとえば、オスカー・レルケの日記によるといったような形である。特に、1933年代以降の議事録や資料は、ナチスによって『退廃芸術』

と烙印を捺された芸術作品がどのように弾圧され、抹殺されて行ったかという過程を知る上できわめて重要である。

今、私の手許にある資料を若干紹介しておこう。これは、ハインリヒ・マンとケーテ・コルヴィッツがアカデミーを追放された時の全アカデミーの臨時会議の席上における院長マックス・フォン・シリングの説明の記録である。

プロイセン芸術アカデミー資料集から抜粋
1933年2月15日の全体会議

ベルリン、1933年2月15日
開始時刻 午前8時

「院長は、アカデミーの音楽部門のための新しい会員、作曲家のマックス・ブッティングを紹介した。それから、彼は、本日の臨時緊急会議の主旨を説明した。2人のアカデミー会員が、社民党と共産党の統一戦線結成のための公然と出された声明に連署した。この2人は、フォン・ケーテ・コルヴィッツとハインリヒ・マンである。院長は、帝国文化担当長官ルスト氏とのやりとりを詳細に紹介した。ルスト氏は、この声明に連署した両名の態度にかんしてアカデミーに責任をかぶせようとしていて、また、アカデミーの解体と文芸部門の廃絶を考えている。院長は、ルスト氏に対して、当然のことながらかかる措置には応じられない旨の返答をした。そして、これら両名の会員の行動にかんしては、アカデミー全体も、あるいはアカデミーの一部門が責任をとることはないと言った。...10時45分に、ハインリヒ・マンがやって来た。院長は、執務室で彼と会った。オスカー・レルケが陪席した。暫しの雑談の後に、院長は会議を再開した。院長の説明によると、ハインリヒ・マンは文芸部門の議長職を辞し、会員の資格も放棄するということである。院長はアカデミーの無事息災を考慮しなければならないので、特段の手段を講じないということを、ハインリヒ・マンは承認した。そして、院長は、アカデミーを苦境から救

い出すことを決心した。デーブリーンは、ハインリヒ・マンがこういうやり方で、院長の決心の結果アカデミーを去らなければならなくなったことに対して、誰ひとりとして発言しないということに遺憾の意を表明した。彼は、院長の態度も正当ではないと非難した。

院長は、ハインリヒ・マンの不快な状態を少しでも和らげようと思って、かれと個人的な会話をしたと答えた。デーブリーンは、ハインリヒ・マンとの再度の話し合いを要求した。これには、会議参加者全体が反対した。院長は、ハインリヒ・マンの明快な返答に対して満足しなければならないと答えた。院長は、参加していた作家全部に、この件にかんするそれぞれの態度決定について尋ねた。

フルダは、文芸部門の出席者は一部だけであるので、即答することはできないと答えた。更に彼は、文芸部門の出席者全員は、ハインリヒ・マンの脱退を遺憾として、特別会議を開いて態度決定をするだろうと述べ、ハインリヒ・マンは、市民なら誰でもすることをしたに過ぎず、マンは、アカデミーと衝突したわけでもないと述べた。

院長は、本日の会議を新聞記者に対する発表の可否について尋ねたが、出席者全員は、本日の会議は非公開であるという理由で発表に反対した。

ペルツヒが、院長が本日の会議で投票を行わなかったことに感謝して、次のように述べた。「投票は不可能であつただろう。何故ならば、アカデミーでは芸術が問題になるのであって、政治問題は扱わないからである。」

11時会議終了

筆記者 アマースドルファー博士

また、収録されている中には、会員の履歴書やアカデミーの変遷を物語る資料、また（これは重要であると思う）国内外の組織や団体との間の往復書簡がある。これらの資料によって、アカデミーが果たした文化的かつ政治的役割と機能が明らかになるだろう。ハインリヒ・マンが文芸部門議長職を追われてからは、かつての表現主義者であったハンス・ヨーストが議長の職に就き、その後はハンス・フリードリヒ・ブルクが選ばれた。つまり、彼らに民族社会主義的な作家としての役割と地位が与えられたことになる。

ここで、いささかアカデミーの歴史的な変遷について語っておこう。アカデミーの歴史は古く、1696

年に、ブランデンブルク侯国のフリードリヒ3世（王位を得てフリードリヒ1世になる）によって設立された。学芸の促進のための援助組織として1704年に王立プロイセン芸術・機械学術アカデミー、1809年以来王立アカデミー、1918年以来は、プロイセン芸術アカデミーとなる。このフリードリヒ1世は、後のフリードリヒ大王に較べると、王としてはさしたる器ではなかったと言える。また彼の父の大選帝侯フリードリヒに較べても、凡庸の君主であった。歴史家は、彼がプロイセンを一選帝侯国から王国にしたことを評価しているが、実際はスペイン継承戦争で皇帝側について「8000人の兵士の血で」王位を贖ったのである。つまり8000人の兵士を提供することで、王冠を手中に収めたと言われている。彼が孤立した凡庸な君主であったならば、王位に就くこともできなかつたであろうし、統治そのものが旨く行かなかつたであろう。これは、彼の宰相エーバーハルト・クリストフ・フォン・ダンケルマンのお蔭である。もともとこのダンケルマンは、市民層の出身であつた。彼の柔軟な頭脳が、この王を補弼するのに大いに役立ったのだろう。

フリードリヒがどの程度に芸術学術に関心があつたのか、今のところ私には分からないのが残念であるが、いずれにしてもプロイセン芸術アカデミーを創設したことによる彼の文化的功績は大きい。もっとも、このアカデミー創設にかんしては、妻のゾフィー・シャルロッテの影響が大きかつたと言われている。文化にかんする関係については、フリードリヒ自身が何も語っていないことから、アカデミー創設に関する彼の考えを知ることはできない。フリードリヒ1世と芸術文化との関係を知る資料がないのが残念である。これは私の推量であるが、このアカデミーは、妻の情熱の結果であつたと思われる。

大体が、彼は宝石のコレクションの方が、同時代の偉大な哲学者であつたライブニッツや宮廷建築家のアンドレーアス・シュリユーターより大事だと思つていたような人物である。学術アカデミーの初代院長はライブニッツであつた。芸術院院長は、このシュリユーターである。彼は、ベルリートの多くのバロック様式の館の建築を手掛けたが、1706年に、フリードリヒの不興を蒙つて院長職を免ぜられる。彼の後を襲つたのは、エオザンダー・フォン・ゲーテと言う建築家で、彼は、完全に宮廷の好みに迎合した仕事をした。このことから考えると、シュリユーターは、自分の芸術観を徹底的に貫いた結果齧首

されたのだろう。

またこれは余談であるが、このエッセーを書くためにフリードリヒ1世を中心に彼の系譜を見てみると、それぞれが個性的でまことに興深い対照をかたち作ってる。そもそも1600年代は、ドイツの文化的発展にとって中断の時代であったと言えるだろうか。即ち、30年戦争の勃発である。この戦争は1618年から1648年まで続いた。30年戦争は、ドイツに大きな荒廃をもたらしたことはすでに知られている。思えば、この戦争は宗教戦争ではあるが、その実態がもうひとつよく分からないと言う学者もいる。しかし、いずれにしても戦争が30年の間続いたことは事実であり、以来諸国間の新しい経済的交流が盛んになったということでは、ドイツ全土が根こそぎ荒廃して再生不可能となったわけではない。中世から15世紀ないし16世紀初頭にかけては、文学的にはいわゆる庶民の手で生産された作品が当時のドイツ文学の特色を作り出していた。ハンス・ザックスがその典型であり、職人の手による諷刺劇が多く生産された。いわゆる庶民が文化的最前線で活躍した時代であった。神秘主義哲学者のヤーコプ・ベームも、ハンス・ザックス同様靴職人だった。先にも述べたように、ひとつの文化の開花期に30年戦争が勃発した。

バロック様式はひとつの流行であった。イタリアを源泉とするバロックに、人々はよりかかることのできる形式を発見したと言えよう。美術も演劇も文学も、バロック様式の中に固有の様式を見出した。元来は、アカデミーは芸術の宮廷的中心化に裨益すべきであったし、またバロックの発展にも寄与し、かつまたベルリンの建築的発展にも寄与するべく機能するようになっていた。1913年にフリードリヒ1世が没して、フリードリヒ・ヴィルヘルム1世が後を襲った。彼は徹底的に父の生活スタイルには反対し、質素を旨とする生活に重点を置いた。彼は祖父の意思を継いで、プロイセンを強大な軍事国家に仕立て上げた。従って、父王が創設したアカデミーには殆ど関心を示さなかった。ハレ大学の学長であったクリスティアン・ヴォルフは、大学から放逐された。こう言う次第で、アカデミーもその存在が危うくなった。それでも、アカデミーは氣息奄奄と命永らえていた。

1790年代までは、アカデミーは特筆すべきものを持たなかった。1790年に、アカデミーに建築学校が創立された。この学校は、1799年にアカデミーに昇格した。1700年代は、前時代とは異なって、いわゆ

るドイツ固有の精神的活動が開花した時代であると言える。知的生産においては、たとえば、私たちはゲーテやシラーを見出すことができる。この時代の文学の急速な展開は、疾風怒涛 Sturm und Drang、古典主義、浪漫主義と続く。私たちは、多くの文人や学者・音楽家の名前を挙げるができるだろう。カント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲル、フンボルトであり、ハイドン、モーツァルト、ベートーヴェンがそうである。しかし、1833年にアカデミーに音楽部門が創設されたのは、その事情は今日では不分明であるが、遅きに失した感がある。いずれにしても、建築や音楽や美術の部門を持ったアカデミーは、今日の芸術大学の淵源である。

1920年から33年までは、マックス・リーパーマンの下で、アカデミーはヴァイマル共和国の文化的フォーラムになった。そして1926年に、かつてのドイツ文芸院がアカデミーに併合吸収されて、文芸部門ができた。当時の院長はヴィルヘルム・ショルツで、1928年にはヴァルター・モーロー、そして1930年から33年にハインリヒ・マンが院長であった。ハインリヒ・マンの後を襲った表現主義者ハンス・ヨーストの憎しげな罵詈もこの資料集の中に残されている。「...トーマス・マン、ハインリヒ・マン、ヴェルフェル、ケラーマン、フルダ、デーブーリン、ウンルーらは、信頼すべき適正と言う点から見れば、決してドイツ文学という概念に合致することのない自由主義的で反動的な作家たちである。このもはや余命いくばくもない作家たちの集団の解体を、われわれは提案する。そして、民族的にして活然たる視点の下で新たに作家たちを動員することを提案する。」

1933年にハインリヒ・マンやケーテ・コルヴィッツが放逐されてからは、ナチスの画一的文化政策の中で、アカデミーは本来の機能を停止したのも同然の状態になった。

戦後1950年に、東ベルリンで彫刻、絵画、音楽、文学、言語の部門を持つアカデミーとして再生した。このアカデミーは、かつてのプロイセン芸術アカデミーの法的後継者であると見做されていた。ドイツが東西に分割された時に、1954年、西ベルリンにおいて造形芸術、建築、音楽、文学の諸部門を持つアカデミーが創設された。このアカデミーには、1984年以降、映画とメディア芸術部門が含まれることになった。以上が、プロイセン芸術アカデミー抄史である。

(おがわ さとる 前文学部教授 名誉教授)